

インターナショナル・ウィーク 第②回

『イギリス』

講演会、民族楽器演奏など多彩なイベント開催

中央大学の国際化を進め、学生の知的好奇心を喚起するとともに、より活気あるキャンパスの実現を目指して、イギリスをテーマにしたインターナショナル・ウィーク（10月17日～21日）が多摩キャンパスで開かれた。インターナショナル・ウィークは今年6月のフランスに続いて2回目。期間中、デイビッド・ウォレン駐日英国大使講演会ははじめスコットランド民族楽器演奏や国際シンポジウムなど、多彩なイベントが行われた。

デイビッド・ウォレン駐日英国大使が講演

「国際関係の重要性―日本と日本国民が 国際社会で活躍し繋がるために―」

デイビッド・ウォレン駐日英国大使の講演会が10月19日、多摩キャンパス8号館8304号教室で開かれた。大使は「国際関係の重要性―日本と日本国民がより国際社会で活躍し繋がるために―」をテーマに講演した。

大使は、会場の大教室と同時中継

大使は冒頭、「36年間外交官とし

て仕事し、私は日本の専門家です」と自己紹介したうえで、「外交は自国の利益を主張するだけでなく共通の価値観を持たなければいけない。どの国も経済、金融、技術、科学などあらゆる面においてその責任を逃れることはできない」と強調した。また、地球温暖化や核不拡散、ソブリンリスクなどを挙げ、こうした問題の解決に向けて「外交官の仕事はますます重要になっている」と述べた。

大使は国際関係の歴史を振り返り、19世紀から20世紀の国民国家によるナショナリズムの台頭が国家間の紛争を引き起こし、その結果、国際協調を図る国際的な枠組みの必要性が認識されるようになり、第一次世界大戦後に国際連盟、第二次世界大戦後に国際連合が設立されたことを説明。またNATO（北大西洋条約機構）、欧州連合（EU）にも触れ、「防衛、経済でも（価値観を共有する）国が国際的な枠組みを作る方がいい、と考えるようになった」と指摘した。国際連合については、現在、イギリス、アメリカ、フランス、中国、ロシアの5カ国の安全保障理事会常任理事国に「日本も入ってもらいたい」と述べ、「日本の経済的・社会的な立ち位置をもっと評価して国際機関の枠組みに反映すべきだ」として日本の常任理事国入りを支持する考えを示した。

大使は、駐日英国大使館が「英国経済を発展させる」という重要な任



講演するディビッド・ウォレン駐日英国大使

務を負っているとの認識を示したうえで、英日関係についても、かつての日英同盟（1902～1922）や第二次大戦後のパートナーシップの再構築について述べた上で、「国際会議において英米間よりも英日間の方が意見一致することが多い」と指摘し、近年の文化交流の拡大などについてもコメントした。

その一方で大使は、英日間の相違

点についても触れ、とくに経済面について「外国企業は日本に投資しにくい。なぜなら、日本には複雑な規制の網があり、経済を中央政府がコントロールしている、本来の意味で自由経済でないからだ」と指摘。日本がEPA（経済連携協定）やFTA（自由貿易協定）に参加し、「外

国企業が日本国内外の企業に自由に投資できるようになることを期待している」と述べた。

また、「日本

は先進国のなかで死刑を執行している数少ない国だ」として、イギリスにおける死刑制度廃止の経緯を説明した上で、日本における死刑制度に対する議論の深まりへの期待

を表明。さらに国家間の不法な児童連れ去りを防止することを目的にした「ハーグ条約」（国際的な子の奪取の民事面に関する条約）に日本が非加入であることについて、「日本政府が真剣に検討し、条約を批准することを願っている」と述べた。

大使は、英国外務省が優先課題にする「英国の繁栄と安全保障、英国

スコットランド民族楽器バグパイフ演奏 親子が奏でる重厚な音色が会場を魅了

スコットランド民族楽器バグパイフの演奏会が10月21日、多摩キャンパス8号館8204号室で行われた。演奏したのは、バグパイフ演奏家の大塚清一郎氏（元駐スウェーデン大使、初代エジンバラ総領事）と息子の法学部4年、清輔さん。珍しい楽器に加え、親子の共演とあって、会場には多くの学生が駆け付け、重厚なバグパイフ演奏に聴き入った。身体を揺さぶるような音響が会場

人の安全通行」のために、「日本との関係を強めていきたい」と述べ、東日本大震災に対する英国国民の支援にも触れて、「日英関係はさらに強固にできると確信している」と強調した。

（学生記者 中野由優季 法学部2年）

の教室を包み込み、キルトと呼ばれるスコットランドの民族衣装を身に着けた大塚さん親子が、入場曲「Green Hills of Tyrol」を演奏しながら登場した。

バグパイフは、バッグと呼ばれる空気をためる袋、3本のドローンという音管、チャンターという縦笛からなり、大きな音特徴的な楽器だ。紀元45年頃、ローマ軍がイングランドを侵略したときに持ち込んだのが

バグパイプの始まりと言われている。当時は、音管が1本だったが、スコットランド人は更に2本（ベース1本とテナー1本）追加して大きな音が出せるように工夫した。クランと呼ばれる部族の戦いのときに、敵を威嚇、味方の士気を鼓舞するために戦場でも演奏されるようになったと言われている。

こうした清一郎氏の解説を織り込みながら、清輔さんの「Steam train to Malaga」のソロ演奏、親子そろってのデュエット曲「Highland Cathedral」と「Amazing Grace」、そして退場曲「Scotland The

Brave」まで全5曲が演奏され、会場は盛大な拍手に包まれた。

演奏終了後、お二人に話を聞いた。清一郎氏は「バグパイプは日本の侍スピリットを感じさせます」と説明

し、バグパイプにまつわるジョークも紹介してくれた。

昔、100歳近くになる、すでに

曲を聴かせると、老人は翌日にはすっかり元気になり、退院出来ることになった。老人が医者に「有難う



演奏する大塚清一郎氏（左）と清輔さん（右）

ございました。

バグパイプのお陰でワシはすっかり元気になり退院出来ることになりました。他の患者さん達にくれぐれもよろしくお伝えください」と言った。医者は渋い顔をして、「他の患者は、バグパイプの騒音のせいで皆死んじまった」と言った。

う。

バグパイプを吹くにはかなりの肺活量が必要で、最初はなかなか音が出せずに苦労するそうだ。特に、空気袋の押さえ方や息を入れるタイミングが難しいという。始めは楽器をすべて組み立てず、縦笛から始めて、徐々にパイプを増やして練習していく。バグパイプを吹きこなすのはとても難しく、曲が吹けるようになるには一年くらいかかるという。

清一郎氏がバグパイプを始めたのは「スコットランドの首都のエジンバラ城で夕日に向かってバグパイプを吹く老人の姿に感動し、その音色を身近に聴いて胸に響くものがあつた」のがきっかけ。自らバグパイプの先生を探し、今までにエジンバラ、ニューヨーク、ボストン、スウェーデンで4人の先生について練習してきた。

一方、清輔さんは8歳のときにバグパイプをはじめ、ニューヨークにいた9歳のとき、東京バグパイプバ

ンドがニューヨークにやってくるというのを知り、これに出演するために1年間練習を積み、パレード用の全15曲をマスターし、親子二人で参加した。東京バグパイプバンドは、そのパレードに参加した100位のバンドの中で最優秀バンドとして表彰されたという。

清一郎氏は「東日本大震災の後、絆という言葉をよく耳にするようになりまし。私達親子にとつては、このバグパイプが絆です」と語る。清輔さんは「スコットランドで

は、良いバグパイパーが育つには7世代くらいかかるそうです。まだまだこれからですね」と言う。

現在、日本では東京バグパイプバンドと関西にあるバンドの2団体が活動している。東京バグパイプバンドは、1975年にエリザベス女王が来日されたときに結成された日本人有志のバグパイプバンドで、清一郎氏と清輔さん親子は、このバンドに所属している。

（学生記者 横松あかり Ⅱ 商学部1年 / 山口莉奈 Ⅱ 経済学部1年）

国際シンポジウム「イギリスにおける日本」 日英間で知的、語学、文化などさまざまな交流を

「イギリスにおける日本」をテーマにしたシンポジウムが10月21日、8号館8204号室で、バグパイプ演奏に引き続いて開かれた。

プレゼンターは、折田正樹・法学

部教授（元駐英大使）、凶師照幸・

英国国際教育研究所所長、Jeff

言要旨。

【折田正樹教授】

各国間の協調がますます必要に

なっている現在、イギリスの日本からみた重要性を再認識する必要がある。イギリスは、かつてのような大国とは言えないかもしれないが、産業革命、議会制民主主義、福祉制度を発展させた経験を有する国であり、

成熟した市場経済として日本と共通の課題を有している。地政学的にも日英は共通の要素を有している。こうした問題について、日英間で知的交流を促進することは日英両国双方にとつて有益であるばかりでなく、

国際社会に貢献することにもなる。

学生の皆さんには、世界の優秀な学生が集まるイギリスの大学への留学も考えてほしい。

そして、国際社会から知識を吸収し、議論を行って日本の考えを発信し、国際社会での日本の存在感を高めるとともに、より良き世界の秩序づくりに貢献できる高度の知的能力を磨いていく欲しい。

【凶師照幸氏】

国際理解教育の視点から、教育本来の



3人のプレゼンターによるシンポジウム

位置付けとその可能性についての研究および教育実践活動を展開している。国際社会における「日本という国、日本語、日本のあり方」をみんなで考えよう。

イギリスで日本に関する理解者を増やすためにも、現地で日本人が日本語を教えるような環境を整えることが必要性だ。また、英語を学ぶことは、物事をいろんな角度から見ることができるとなる。英語を学ぶことによって、どの国でも生きていける普遍的価値を学んで欲しい。

[Jeff Streeter 氏]

イギリスについて「英語以外は

生協ではイギリス・フェア 食品、文具などを展示販売

インターナショナル・ウィーク開催中の10月17日から21日まで、多摩キャンパスの生協売店の一角でイギリスにちなんだ商品の展示販売が行われた。

しゃべれない。イギリスは雨、霧が多い。傘が必須。いつも帽子を被っている。真面目である」などというイメージを抱くかもしれない。だが実際は、こういった英国のイメージはナンセンスである。

こうした固定観念は、もう一つの国を理解する際の障害になる。お互いを知る為に私達は、奨学金制度などを充実し、お互いの言語を、より多くの人が学ぶ機会を得る必要がある。日本、イギリス両国の歴史を相互に知るために、更なる文化交流を進めていきたい。

(学生記者 梶原麗奈 II 公共政策研究科修士1年)

今年の6月のフランスに次いで2

回目、生協内に特別に設けられた3.6メートル四方の売店コーナーには、イギリス・ロンドンの観光名所でもあるビッグ・ベン (Big Ben) を模つ

た紙製ビッグベンが飾られ、イギリス産の紅茶をはじめ20種類を超える食品や文具、化粧品、雑貨、書籍などが陳列された。

中央大学生協同組合店舗事業部の源原稔店長は、「大学の催しに協力できればと考え、イギリスにまつわる商品をインターネットを使って調べ、出入りの問屋に声をかけて特

別に仕入れました。学生さんも目にとめてくれています」と話していた。展示商品の中には、サッカーファンなら見逃せないイギリスの名門サッカーチーム、マンチェスター・ユナイテッドFCのユニフォームもあり、仕入れた数点はすぐに売れ、人気の高さを示していた。



盛りだくさんの商品が展示された生協のイギリス・フェア

イークでは、人文研公開研究会「イギリス映画とナショナル・アイデンティティ」や「イギリス映画の夕べ」が開かれ、中央図書館2階ホールでは図書館所蔵のイギリス関係資料が、また1号館1階ホールでは中央大学とイギリスとの深い関わりを示す資料などが展示された。

(編集室)